

# ティグリス川上流域の新石器時代

—ハッサンケイフ・ホユック遺跡とウルス・ダム水没地域の調査—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授

## Neolithic Period in the Upper Tigris: Insights from the Excavations at Hasankeyf Höyük and Other Sites in the Ilusu Dam Reservoir Area

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

三宅  
裕

### 1. はじめに

トルコ南東部に位置するティグリス川上流域は、近年に至るまで考古学的調査がほとんど実施されず、あたかも遺跡の存在しない空白地帯であるかのように扱われてきた。新石器時代についても、灌漑用ダムの建設に伴う緊急調査として発掘調査が実施されたハラン・チェミ遺跡を除いて、ほとんど情報のない状況が続いていた。こうした状況に大きな転機をもたらしたのが、ティグリス川ではトルコ国内で最初の大型ダムとなる、ウルス・ダムの建設計画であった。水没予定区域内に位置する遺跡を対象にした緊急調査プロジェクトが組織され、域内の遺跡踏査を皮切りに、数多くの遺跡で緊急調査が実施されることとなった。2019年にダムが竣工し貯水が始まると、2020年春には多くの遺跡が水没することとなり、20年近くにわたる緊急調査プロジェクトも終焉を迎えることになった(図1)。多くの遺跡が人造湖に沈んでしまったことは残念なことであるが、この間の遺跡救済調査の成果により、ティグリス川上流域の遺跡についての考古学的資料は飛躍的に増大し、新石器時代についても数多くの新たな知見がもたらされた。本稿で報告するハッサンケイフ・ホユック遺跡の発掘調査も、この緊急プロジェクトの枠組みの中で、途中何回かの中断を挟みながら、2011年から2019年にかけて実施されたものである。

### 2. ハッサンケイフ・ホユック遺跡の概要

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は、中世イスラム期の主要都市であるハッサンケイフ(フスニ・ケイファ)の2kmほど東方に位置し、ティグリス川の左岸に立地する、先土器新石器時代を中心とする集落遺跡であ



図1 ハッサンケイフ、イスラム期の城塞地区：水没に備え補強が進む(2019年11月)



図2 ハッサンケイフ・ホユック遺跡とティグリス川

る(図2)。本遺跡は、この区域ではほぼ西から東に向かって流れるティグリス川によって形成された狭隘な河谷内に位置し、背後に迫る石灰岩の山地である南ラマン山脈を刻むワディがティグリス川へと注ぐ合流地点付近に立地している。

遺跡からは鉄器時代やヘレニズム期のピットが新石器時代の層に掘り込まれる形で検出されたが、堆積層

としては確認されず、表土直下から新石器時代の層となるため、比較的広い範囲を調査することが可能であった。新石器時代の層は少なくとも2つの時期に区分され、下層の第1期では円形の半地下式の遺構が検出され、上層の第2期では遺構のプランが方形へと変化する。放射性炭素年代によれば、紀元前10千年紀後半を中心に居住が営まれたとみられ、第2期は一部前9千年紀前葉まで下ると考えられる。これはレヴァントを中心とした編年の枠組みに基づくならば、先石器新石器時代A期(PPNA)にほぼ相当することになる。

### 3. 生業

ハッサンケイフ・ホユック遺跡の動植物資料の分析からは、栽培植物や家畜の存在を確認することができず、この遺跡に居住していたのは狩猟採集民であったと評価することができる。植物資料はピスタチオ、アーモンド、エノキなどの木の実が中心で、レンズマメは多少出土しているものの、オオムギやコムギなどのムギ類がほとんど検出されなかったことが大きな特徴である。こうした植物利用の様相は、ハラン・チェミ、デミルキョイ・ホユック、キョルティック・テベ、グシル・ホユックなど、ティグリス川上流域の遺跡でも認められ、ムギ類の利用が概して低調であったことはこの地域のPPNA期の生業の特徴とすることができる。グシル・ホユック遺跡では、集落が廃絶される直前のPPNB期初頭の層から栽培型の特徴をもったムギ類が検出され、この地域でムギ類の利用が本格化する時期についても明らかになってきた。動物の利用についてはハッサンケイフ・ホユック遺跡ではヒツジとヤギが中心で、大量の骨が出土しているが、形態的に家畜と認定できるものは検出されていない。これに加えイノシシ、アカシカのほか、ウサギやキツネなどの小型動物、さらにはコイ科を中心とする魚の骨も大量に出土している。遺跡周辺の資源を幅広く利用していた様子がうかがわれる。

### 4. 定住集落

ハッサンケイフ・ホユック遺跡から多数検出された遺構は、地面をピット状に掘り込み、壁に石を積んで補強し、さらに内面に粘土を厚く塗って仕上げられている。単なる小屋状の遺構ではなく、長期間にわたって使用することを前提にした、恒常性の高い建物であると言える。また、住居跡であったと考えられるこ



図3 貯蔵施設集中区

した遺構は、同じ場所に何度か建替えられたり、壁の補修がおこなわれていたりする例も少なからず認められる。繰り返しメンテナンスがおこなわれている様子からは、長期にわたって継続的に居住されていたことをうかがわせる。このような半地下式の住居跡がお互いに壁を接するような形で、密度高く分布していることも特徴で、全体的にみて定住度はかなり高かったと想定される。ハラン・チェミ遺跡から出土した淡水産二枚貝の成長線分析や渡り鳥を含む鳥の骨の分析からは、ほぼ年間を通じて居住されていた可能性が高いことが示されており、ハッサンケイフ・ホユック遺跡も含めこの時期の狩猟採集民は遊動的な生活を送っていたのではなく、すでに定住集落を営んでいたと評価することができる。また、ハッサンケイフ・ホユック遺跡では新石器時代に形成された人為的な堆積が9.5mにも及ぶことが確認されており、ほかの同時期の遺跡もテル型の遺跡を形成していることから、定住狩猟採集民によって営まれた集落であると考えられる。

さらに、定住度の高さを示すものとして、直径が2~3mの貯蔵穴が多数検出されていることも挙げることができる(図3)。こうした遺構はピット状に掘り込まれたものであるが、底面に石敷きが認められ、その上に厚く粘土が貼られている。壁もピットの内面に厚く粘土を貼って構築されており、礫が壁の芯材として並べられている例も確認されている。こうした遺構の構造は、周囲の土壌からの湿気等の影響を極力弱めようとする工夫であると考えことができ、貯蔵用の施設であったと考えることができる。貯蔵施設と集団の移動性との間には負の相関関係があることはよく指摘される場所であり、こうした貯蔵穴と考えられる遺構は、キョルティック・テベやボンジュック・タル



図4 同じ場所に繰り返し建替えられている公共建造物

ラ、チェムカ・ホユックなど、ティグリス川上流域の同時期の遺跡からも検出されており、この地域のPPNA期の遺跡に共通する特徴であると言える。

## 5. 公共建造物の存在

ハッサンケイフ・ホユック遺跡について興味深い点は、農耕牧畜を営んでいた証拠がみられないにもかかわらず、社会の複雑性が発達していたことを示す資料が数多く得られていることである。まず、集落のほぼ中央部から、一般の住居跡よりも規模の大きい公共建造物的性格をもった建物が確認されている。こうした建物は第1期にも第2期においても検出されており、第1期にはほぼ同じ場所に頻繁に建替えがおこなわれたことも明らかになっている。第2期の3号建物は1辺が約9mある方形の建物で、石灰岩製の板石が立ったままの状態出土したほか、2列に並ぶ石列に蓋石が伴う水路状の施設や粘土によるプラットフォーム状の施設なども確認されている。第1期の層では、規模の大きな建物が3号建物の直下から検出され、その場所が世代を超えて特別な場所として意識されていたことがうかがわれる。建物のプランは円形となっているものの、敷石を伴うプラットフォーム状の施設や壁に白色プラスターが塗られる場合もある。そうした建物が頻繁に建替えられながら、7基同じ場所に連続して構築されたことが確認されている(図4)。こうした特別な建物は集落の中央部に位置し、一般の住居跡とは大きく性格を異にしていることから、集落の構成員の紐帯を強化するための共同の儀礼を執りおこなう場となっていたと考えられる。神殿と呼んでもいいと考えているが、ここでは公共建造物としておく。

このような公共建造物は、先土器新石器時代の遺跡



図5 副葬品を伴う埋葬

において多くの事例が知られるようになった。ティグリス川上流域においても、ハッサンケイフ・ホユック遺跡のほかに、グシル・ホユック遺跡やボンジュックル・タルラ遺跡において確認されている。PPNA期のものであるグシル・ホユック遺跡の公共建造物では、石灰岩製の石柱が4基、原位置を保った状態で確認されている。PPNB期の事例であるボンジュックル・タルラ遺跡の公共建造物は方形プランとなっているが、やはり4基の石柱を伴っている。ボンジュックル・タルラ遺跡では、このほかにテラッゾと呼ばれる特殊な床面を伴う建物も報告されており、チャヨニュ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡など、より西方の遺跡との関連もうかがわれる。また、2021年にはディヤルバクル東方のアンバル・チャイ流域のグレ・フツラ遺跡でも先土器新石器時代の公共建造物的性格をもった建物が発見されたとの情報がある。こうした新たな発見は、ティグリス川の河谷だけでなく、広い範囲に先土器新石器時代の遺跡が分布していることを示すとともに、この時代の遺跡には公共建造物的性格を有す建物が存在することが、むしろ一般的な姿であることを示唆していると言える。

## 6. 特殊生産とシンボリズム

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では住居跡や特別な建物の床下から、埋葬が150基以上検出された。こうした埋葬の中には高度な工芸技術により製作され、威信財的性格を有すると考えられる副葬品を伴っている事例も認められる(図5)。石製のバトン、石灰岩製の棍棒頭などがそれに相当し、ほかにもクロライト製の石製容器、石製ビーズや石製・骨製の装飾板などの多彩な装身具も出土している。これらの器物は、高度な工芸技術を駆使し、大きな労力をかけて製作されてい

るものであり、特殊生産として評価することができる。中にはヘビやサソリなどの動物像や幾何学文が描かれている例もあり、シンボリズムの発達を示すとともに、こうした器物がその背後にあるイデオロギーと不可分な関係にあったことを思わせる。さらに、こうした特殊生産の事例は、容易には入手することのできない特別な器物を保有することで、自らの権威を高めようとした、エリート層の存在を想定させるものともなっている。地中海産の貝を素材とした装身具なども、稀少な素材の入手を強く希求する力が働いていたことを示すものであり、同じ文脈で理解することができる。特殊生産の事例はハラン・チェミ、キョルティック・テベ、グシル・ホユックなどの遺跡でも数多く確認されており、これもティグリス川上流域のPPNA期に共通してみられる特徴であると言える。PPNA期の定住狩猟採集民は、単純で平等主義的であったわけではなく、社会的不平等を内包するような複雑な狩猟採集民であったと評価するべきであると考えられる。

## 7. おわりに

ティグリス川上流域の先土器新石器時代の遺跡はハッサンケイフ・ホユック遺跡を含め、ハラン・チェミ、デミルキョイ・ホユック、キョルティック・テベ、グシル・ホユックなど、PPNA期に居住が営まれた遺跡が中心となっている。ウルス・ダムの建設地に近いボンジュックル・タルラ遺跡やチェムカ・ホユック遺跡でも、近年の調査でPPNA期の層が確認されている。全貌はまだ不明であるとはいえ、かなりの密度で遺跡が分布していたと考えられる。人口もそれだけ多かったということであり、相互の交流に加え、お互いの存在を意識した競争意識も高まったことが想定される。それには完新世に入って温暖な気候が安定し、経済的基盤が整ったことも一定の役割を果たしたと考

えられるが、社会の複雑性を発達させるには集団間の相互の作用が最も重要であったのではないかと思われる。

ボンジュックル・タルラ遺跡ではPPNB期の層も確認され、グシル・ホユック遺跡で示されたように、ムギの利用が進んだと考えられるPPNB期に、ティグリス川上流域において社会にどのような変化がみられたのか知る手がかりも得られるようになった。狩猟採集社会における社会の複雑化の進展に加え、農耕・牧畜の開始後の状況を対比的に捉えられる状況が整いつつあると言える。

## ■参考文献

- ・ Carter, T., Moir, R., Wong, T., Campeau, K., Miyake, Y., and O. Maeda 2021 Hunter-fisher-gatherer river transportation: insights from sourcing the obsidian of Hasankeyf Höyük, a Pre-Pottery Neolithic A village on the Upper Tigris (SE Turkey). *Quaternary International* 574: 27-42.
- ・ Hongo, H., Arai, S., Takahashi, R. and C. Y. Gündem 2020 Transition to food production suspended - a remarkable development in the eastern Upper Tigris Valley, southeastern Anatolia. In Peters, J., McGlynn, G. and V. Goebel (eds.), *Animals: Cultural Identifiers in Ancient Societies? Proceedings of the 2016 International Symposium, Munich, Germany. Documenta Archaeobiologiae* 15, 155-172. Rahden/Westf., Leidorf.
- ・ Itahashi, Y., Miyake, Y., Maeda, O., Kondo, O., Hongo, H., Van Neer, W., Chikaraishi, Y., Ohkouchi, N. and M. Yoneda 2017 Preference for fish in a Neolithic hunter-gatherer community of the upper Tigris, elucidated by amino acid  $\delta^{15}\text{N}$  analysis. *Journal of Archaeological Science* 82: 40-49.
- ・ Maeda, O. 2018 Lithic analysis and the transition to the Neolithic in the Upper Tigris Valley: recent excavations at Hasankeyf Höyük. *Antiquity* 92(361): 56-73.
- ・ Miyake, Y. 2016 Tarihöncesi dönemde Hasankeyf. *Aktüel Arkeoloji* 53: 26-39.
- ・ Tatsumi, Y. 2020 A Neolithic sedentary hunter-gatherer settlement with densely arranged buildings: results of geophysical prospection at Hasankeyf Höyük in south-eastern Anatolia. *Archaeological Prospection* 27: 329-342. doi: 10.1002/arp.1777.
- ・ Uluçam, A. and Y. Miyake 2018 Excavations at Hasankeyf Höyük, southeast Anatolia. In Batman Museum (ed.) *Ulusu Dam Excavations*, 25-54. Batman Museum Directorate, Batman.